

『国書総目録』書誌情報データベースの主題検索

— 分類をアクセス・ツールとして —

山 田 直 子

要 旨 国文学研究資料館ホームページで実験公開中の国書基本データベース（著作編）について、主題検索に分類を用いることの有効性と問題点を考察する。『内閣文庫国書分類目録』を参考に分類項目を階層化した表を作成し、名辞の定義、分類観点の相違等を具体例に基づき分析する。DBを提供する側から今後の課題を述べ、利用法開発へ向けての検討材料とすることを目的としている。

はじめに

『国書総目録』（市古貞次等編、岩波書店 1963-76 全9冊）は日本人の著述になる、江戸時代末までの書籍について、書誌的事項と所在を明らかにした唯一の総合目録であるが、国文学研究資料館ではこの『国書総目録』（補訂版 1989-91）の、所在情報を除いた作品に関する全事項を電子化し、データベース（DB）を構築している。このDBには『国書総目録』の続編として当館が編集している『古典籍総合目録』の新規追加項目も含まれ、約43万件の著作と6万5千件の著者データが蓄積されている。DBに入力されているのは以下の項目である。

書名・よみ・巻冊数・角書・別称・分類・著编者・成立・板本の刊年・備考（著作注記）

当館ホームページ電子資料館実験の中で公開中の検索システムでは、これらの書誌的事項すべてを対象とし、全文検索により指定された文字列を探し出す。書名中の語句、成立年代、分類、著者名等を組み合わせ、「両方とも」「いずれか」など条件を指定してゆけば、利用者の関心にそってさまざまな角度からデータを抽出、配列することができ、五十音順の『国書総目録』とは全く異なる引き方が可能となった。

この『国書総目録』書誌情報データベース⁽¹⁾は、当館がこれまでオンラインで公開してきたマイクロ資料や館蔵和古書の目録DBと較べても、全く異なる機能を実現したとすることができる。従来の当館目録DBの利用は、既知の書名、著者名、書肆名等による探索を主としている。これに対して『国書総目録』書誌情報DBでは、書名中の語句、年代、分類等を組み合わせて検索し、利用者の関心にそった未知の文献情報を抽出、配列し、通覧（ブラウジング）することが可能である。目的とするある本の周辺に思いがけない資料を見つけたり、通覧しながら問題に気づくといった、情報収集機能や、問題発見的な探

索を実現したと言えるだろう。

特定の専門領域の中で既知の文献を探すのではなく、利用者にとって周辺にあたる分野で未知の文献を探索する機能は、適切な主題アクセス機能と相俟って効果を発揮する。DBの主題検索機能を強化するためには、書名中の語句によるだけでなく、書物の内容、主題を指標とするアクセス・ツールの開発が必要である。このような主題アクセス・ツールとして分類が注目されるようになったのは、OPACの出現を契機としてであるが、その後、電子図書館システムの開発が進むにつれ、分類はあまり顧みられなくなったかのようである。数十万点の書物の書誌的事項が瞬間的に検索できるようになって、分野を限る必然性がなくなったのである。

しかし和漢書の目録は伝統的に分類目録が主流であり、『本朝書籍目録』以来の分類法の史的展開に学ぶべき点が多い。近世以前の日本の書籍を網羅した電子化目録が完成した今だからこそ、このDBを活用して古典籍分類を検討し直し、主題検索に活かす方向を探るべきではないだろうか。本稿ではこのような意図から『国書総目録』の分類について考察し、DBの主題アクセス・ツールとして国書分類を用いる方法を考えたい。

分類の問題を考えるにあたっては、名辞そのものと、分ける基準との二点に注目する。具体的には、『内閣文庫国書分類目録』（1961）を参考に『国書総目録』の分類項目一覧を作成し、考察の基礎資料としたい。主題検索に分類を用いる際の問題点や、DBを提供する側が何を付加してゆけばよいかといった実用化への見通しと今後の課題についても述べたいと思う。

1 分類名辞のありかた

1-1 書架分類と書誌分類—内閣文庫国書分類表との比較—

国立公文書館内閣文庫の平成六年度展示会は「古書に見る暮らしの知恵—手引書の世界—」をテーマに開かれたが、その時衆目を集めたのが『都風俗化粧

『国書総目録』書誌情報データベースの主題検索（山田）

伝』（三巻 佐山半七丸著、速水春暁斎一世画 文化一〇刊）であった。解説によれば⁽²⁾、本書は化粧・髪型・着付・所作等美容に関する京都の洗練された技術を図を加えて紹介したもので、当時江戸の市中に増えていた、地方から流入した人々、特に女性を対象に刊行された総合的なファッション・ブックである。

ところがこの本を『内閣文庫国書分類目録』を繰って探そうとすると、おさめられているのは「九 政治・法制」－「7 典例・儀式」－「(七) 装束・服飾」の項である。『国書総目録』で『都風俗化粧伝』を引くと、その分類は「風俗」となっており、主題検索に用いる語としては後者「風俗」の方が適切と言えよう。両者のこのような相違は書架目録 (shelflist) と総合目録 (union catalog) の違いに由来している。『内閣文庫国書分類目録』は文庫の蔵書を管理するための書架目録であるから、どの本も必ずある項目におさめられ重出していない。これに対し『国書総目録』の書誌的事項として付与されている分類は、その本の内容、何について書かれたものかをあらわす語、キーワードに近い性格を持っていると言える。データベース化されるとこの性格はさらに強まり、分類は複数付与が可能な、その本の属性をあらわす語に近くなってゆく。

『都風俗化粧伝』について言えば、書名中の語「都」「風俗」「化粧」あるいは角書の「女子愛敬」などがよくその内容をあらわしているの、データベース化の際、さらに分類を付け加える必要はないだろう。書誌情報DBの分類は、実際の書架や特定の分類表を意識しなくてもよい。むしろその本の中身、描かれている主題を引き出すための索引語、キーワードの性格を持つことが望ましいのである。

以上述べてきたような書架分類と書誌分類、さらにそれらが電子化された時の分類という三者の相違に留意しつつ、内閣文庫国書分類表を参考に、『国書総目録』書誌情報DBの分類項目を一覧しやすいようまとめたのが表1である。内閣文庫国書分類表の大項目「一 総記」から「一七 武学・武術」までにあ

わせて◆の項目を立てたが、大項目の下位におさめにくい名辞については、ある程度一括できるものは◇のもとにまとめている。また大項目よりも上位にある概念語、宗教、芸能などは*を付して階層からはずしている。他にも同階層の横並びの位置にはないことを示すため*を付して配置した語がある。寺社、書画などは複合語と考え、関連する二つの上位項目の間に○を付して配列している。[] で括った名辞は『国書総目録』にはなく表作成の便宜上補った語である。本表は当館報告第12号「古典籍総合目録－データベースの構築と出版」(1991) 収載の表をもとに作成したが、出現頻度が1～2回の分類語は収録しなかった。

表は、より包括的な概念をもつ語を左に、下位語を右に並べたもので、語の意味によって階層化している。左の上位語で引けば右の本がすべて出てくるかのように思えるが、実際には右の細分化されたカテゴリーに入りきらないような書物に上位の概念語が付与されている。一例を挙げれば「諸芸」を検索すると12件、『稽古の伝』『万芸間合袋』などで、茶道以下の細かい項目に分けられない本である。「諸芸」はいわば「諸芸雑」、「その他諸芸」のような意味合いで使われているのである。『内閣文庫国書分類目録』では大項目ごと最初に「1 総記」が置かれているが、『国書総目録』の◆の語はこの総記に近い性格を持っていると言えよう。これらの名辞で分類された書物の集合が、下位の集合を含んだり、上位に含まれたりといった関係で構造化されているわけではない。

この表は階層的に構造化されたタクソノミーの配列ではなく、すべての語が並列的に存在しているインデックスである点、注意が必要である。上位語で引いた時、下位語全体の集合が形成されるよう、シソーラスを工夫することも考えられるが、上位、下位という包含関係はなかなか決めにくく、細かく規定してしまうことのデメリットも大きい。

本が一箇所にしか配架できないのと同じように、表の分類項目もある箇所に

おさめねばならないが、兵法は政治か、武学かなど迷うところである。たとえば『国書総目録』で「評判記」を検索すると『吉原細見』と並んで『三ヶ津学者評判記』なども出てくるが、この語は表のどこに配列すればよいのだろうか。『内閣文庫国書分類目録』では『芳原細見図』は「八 地理」－「2 日本地誌」－「(四) 遊覧・遊歴」－「(1) 遊覧」－「④ 遊里」に分類されている。吉原細見を江戸文学に入れる考え方もあるが、長澤規矩也氏は、吉原細見は文学書ではなく、遊廓の案内書であるから地理の案内書に附すことにしたと述べておられる⁽³⁾。「評判記」は広い範囲で使われる語だが、『内閣文庫国書分類目録』では「七 歴史」－「2 日本史」－「(六) 伝記」－「(3) 評判記」と位置づけられている。

このように較べてみると『国書総目録』の分類語は索引語、キーワードに近い性格を帯びて付与されているので階層化になじみにくいことがわかる。当面はこれらの語を並列的に存在する索引語として用い、DBを活用して語の意味を検討、再定義しながらシソーラスを作成する方向も考えてゆきたいと思う。

1-2 命名と分類

主題検索の索引語として国書分類を用いようとする際、最も大きな問題は名辞の定義である。類似のものを集め、命名し、類に分かつという一連の行為自体がその時点の分類意識によるものだが、そうした意識のあらわれが分類名辞である。分類語は歴史的に存在したジャンルの反映としての、当時の意識を示す名辞であることが望ましい。が、一方で言葉の意味の変化や最近の研究成果をふまえた新しい分類のありかたも追求してゆかねばならない。この課題について具体的に述べるため、典型的な例として*を付した小説の語をとりあげる。

室町物語あるいは中世小説とも呼ばれるジャンルの上位語は物語だろうか、それとも小説だろうか。日本十進分類法では「913 小説. 物語 Fiction. Romance. Novel」と一括されているが、この点については西郷信綱氏の「小

説史のなかで⁽⁴⁾」の一文が示唆的である。

東洋では古くから、『漢書』に「小説家者流ハ、蓋シ稗官ニ出ヅ。街談巷談、道聽塗説者ノ造ル所ナリ」(芸文志)と見えるとおり、正史や君子の経伝にたいする小知のものの言、つまり民間の説話を小説と呼んでいた。だからそこでは『金瓶梅』や『紅樓夢』はもとより、『水滸伝』とか唐宋伝奇とかの類もみな小説のなかに入るわけで、そのへんのことは魯迅の小説史を見てもわかる。東洋流のこの定義をうけ入れるなら、『源氏物語』をはじめとする平安朝の物語などは申し分なく小説であり、古代の小説と呼んで一向さしつかえない。

と述べられた氏の意図は

『源氏物語』という作品の不思議さを思うにつけ、物語を小説から隔離するだけでは埒はあかず、やはりそれらを室町期・江戸期の作などもくめ歴史的に総括するジャンルの名が必要だと感じ、それを小説史と呼んだままである。

というものであった。ここでは小説は包括的な語義で用いられている。

長澤規矩也氏は

漢書藝文志以後も、歴代の書目には殆ど皆小説家といふ分類がある。しかし、何れにも、今日我々が小説とよんであるものとはづれた内容の書物がその中に著録せられてゐるのを見る。つまり、支那でよばれる小説の語の意味が今日の我々の考と違ふからで、支那では、もつと廣範圍のものなのである。

と指摘され⁽⁵⁾、『内閣文庫国書分類目録』では小説の語を包括的な概念として上位に位置づけている。その階層は「五 文学」-「1 国文」-「(二) 小説」-「(1) 古物語附擬古物語」~「(5) 中世小説」「(6) 近世小説」となっている。これに対して『国書総目録』で「小説」と分類された作品は『金瓶梅訳文』(岡南閑喬訳)などごくわずかで狭義の意に用いられている。

『国書総目録』編纂の時点と現在とでは分類意識にも変化が生じていよう。長期的な課題として分類名辞のありかたを考えてゆくののであれば、その名辞がある時代に特有のものとして付与され、年代検索のキーとしても使えるような、時間軸上に定義する方向を探りたいと思う。バーバラ・ルーシュ氏が命名された「室町絵草子⁽⁶⁾」のような魅力的な名辞をDBに取り込んでゆくことが望ましいのではないだろうか。

2 分類観点をめぐって

以上、命名と体系化について考察してきたが、どのような観点から分類するかという問題も、分類法を考えるうえで重要である。以下ジャンル、書物、学問の三観点をとりあげて検討したい。

2-1 文学ジャンルと書名

はじめに文学作品の分類について『内閣文庫国書分類目録』の「九 政治・法制」-「7 典例・儀式」の「(一) 総記」に収録されている『江談抄』『中外抄』等を例として考えてみたい。これら平安朝末から鎌倉期に成立した説話集は『日本古典文学大辞典』によれば「宮廷の故事・典礼や、貴族社会の世間話説話についての当時の有識の貴族の談話筆記や日記録からの抄録が主な内容をなして⁽⁷⁾」おり「典例・儀式」の分類はよくその主題をあらわしていると言えよう。しかし『富家語』も含め、これらの作品は『国書総目録』では「説話」に分類されており、その語だけでは語られている内容が何かを知ることはできないのである。この不都合は文学作品の分類が主としてジャンルによっていることに由来している。日本十進分類法の解説が述べるように「文学作品は主題よりも詩か、戯曲か、小説かと叙述形式のほうが重視される⁽⁸⁾」のである。

叙述の形式による分類項目はそれのみでは主題検索のツールとならないが、内容をあらわす語と組み合わせれば有効に機能する。例を挙げれば、分類「地

誌」で検索すると7,300件余りになるが、これに「なにわ」のよみをかけあわせれば百分の一、70数件に絞り込むことができる。『春詠浪華名所』『浪花講定宿帳』など、地誌の場合、書名からその内容、対象とする地域を知ることが比較的容易なので書名中の語句を用いたわけである。

『中外抄』や『富家語』のように書名が内容を知る手がかりとはならない場合、先に引用した『日本古典文学大辞典』の説明を注記欄に加えることができれば、DBの主題検索に有益である。その作品の内容を述べた解題的文言をデータに加える、もしくは別に解題DBを構築し、リンクさせて検索することが望ましいのである。

目録DBを検索する際、最も重要なキーは書名中の語句であるが、文学的な作品ほど書名から何が書かれているかを知ることがむずかしいという問題もある。たとえば『さかゆく花』（一冊 永徳元年成立）。別書名『永徳行幸記』『後円融天皇花御所行幸記』ならば年代、人名までを含んで主題検索の対象となるが、『国書総目録』に立項されている『さかゆく花』だけでは内容の見当がつかない。この本の場合はデータベース化され、別書名中の語句からも引けるようになったことで解決したが、他に手がかりがない作品には、やはり解題的文言の付加が必要となるだろう。

以上述べてきたような文学作品のジャンルと書名をめぐる問題については、この書誌情報DBを活用して語句の意味を分析し、分類名辞を再検討してゆくことが課題である。例を挙げると、富士日記のような書名の場合、富士を主題として記された日記の意だが、ジャンルとしては日記というよりも紀行文であり、歌文であろう。あるいは随筆かもしれない。一般からのレファレンスによくある「富士をテーマとして書かれた文芸作品を知りたい」といった質問に対しては、DBで「富士」を検索し回答するだけでなく、書名中の「日記」のニュアンスも説明しなくてはならないだろう。このように専門領域の研究成果を取り込んで、かつ広範な利用者からの要求に答えることはなかなか困難だが、

DBを作成し、提供する側の課題として取り組んでゆきたいと思う。

2-2 書物の分類

文学作品の分類が主として叙述の形式によっていることをみてきたが、たとえば説話文学というジャンルをあらわす項目に「説話」と「説話集」とがあることなどはどのように考えればよいだろうか。以下分類観点の一である書物の形式を基準とする分け方について考察する。

『国書総目録』の「説話」は文学史のジャンル名としての「説話文学」とほぼ同義であり、その範囲や内容は「説話集」とも重なっている。とはいえ「説話集」は「口承もしくは書承によって伝承されたさまざまな話を集録した書物」であり、「説話」というジャンル名に書物の形態「集」を組み合わせた分類項目である。「集」とつく他の項目も皆「集録した書物」の意味を持っている。

総記の「事典」「索引」「便覧」「叢書」「類書」など書物の形式による分類は、ある特定の主題に関する索引を探したい、年表を見たいといった探索要求に用いられる語である。「目録」「書誌」「書目」もそのような形式的要素を持っているが、これらはむしろ「書物という主題について書き著した書」と解釈した方がよいかもしれない。『国書総目録』は近世以前の日本の書物について記されたものであるから、書物という観点からすべてを分類することが可能なはずである。写本、板本あるいは本の大きさなど様々な観点から分けることができ、それらを組み合わせればDBの検索上有効に機能する。

大きな集合となるが、形態や形式だけでなく主題で分けることもできる。この場合は「仏書」「医書」「歴史書」など「書」を付した形になるが、この「書」は「～に関する書物」の意をあらわしている。こうした主題による類分けは下記の『倭板書籍考』（十卷五冊 幸島宗意 元禄一五刊）のような解題目録に見ることができる。

神書 儒書 武書 史伝雑記 医書 諸子百家 詩文尺牘 倭歌

倭字諸書 字書法帖

書肆の出版、販売目録である書籍目録にも同じく仏書、儒書、神書といった名称が使われているが、なかに文学ジャンル名に「書」を加えた名辞が見られることは興味深い。「連歌書」「俳諧書」「物語書」のように表現されると、叙述の形式によっていたジャンル名が、書物の内容をもあらわしているもののように思えてくる。『改正 広益書籍目録』（貞享二年印）巻三の目次は以下のとおりである。

仮名和書 歌書並狂歌 連歌書 俳諧書 女書 謡書 糸竹書
算書 盤上書 茶湯書 立花書 躰方書 料理書 名所記 紀行
雛形并絵尽 咄本 舞并草紙 物語書 好色并樂事 往来并手本
石摺并筆道書 掛物並図

『倭板書籍考』は儒書、和刻本漢籍など學術書の解題に重点をおいていたが、「国学の主題別分類法⁽⁹⁾」と評される『群書類従』の分類には「～書」の形はなく主題のみを掲げている。この点に注目し『和学講談所蔵書目録』と比較してみると、下記のように後者には書物の形式による分類名辞も用いられていることがわかる。「記録」「語録」「文書」「字書」「類書」などで、類従の主題分類によりながらも書物という観点からの項目が加わっているのである。

群書類従

神祇 帝王 補任 系譜 伝 官職 律令 公事 装束 文筆
消息 和歌 連歌 物語 日記 紀行 管絃 蹴鞠 鷹 遊戯
飲食 合戦 武家 釈家 雑

和学講談所蔵書目録

神祇 国史 御記録 補任 系譜 伝記 官職 律令 公事 装束
文筆 往来 語録 文書 和歌 連歌 物語 日記 地理 外国
紀行 管絃 遊戯 合戦 武家 釈家 字書 類書 雑類

現代の図書を形式で分類する時、事典、叢書などを外形式、伝記、地誌など

を内形式と呼んで区別しているが、伝記や地誌は主題を示す表現と考えることもできる。古典籍分類法の史的展開に学びつつ、書物の形式による分類と主題による分類とをどう使い分けてゆくかが今後の課題であろう。

2-3 学問の分類

書物を分ける基準のうち、主題との関わりが最も深いのは学問分類であるが、従来図書の分類と学問の分類とは切り離して考えるべきだと言われてきた。しかし、電子化目録では複数の分類項目を与えられる利点を活かし、今日感覚でとらえた学問分類を付加して、主題検索に役立てることが可能である。以下実例を挙げてその可能性について述べたいと思う。

『国書総目録』で「金石文」と分類された資料には『坪碑史証考』『奥州燕沢碑文考』など金石文に関する考証、金石文について記した書が多く含まれている。今日の感覚からすれば「金石学」「金石誌」である。金石文そのものと、金石文を主題として書かれた書物の意であり、書物という観点から見れば「金石誌」、学問として分類すれば「金石学」ということになる。主題検索の際にはこれらのどの語を用いても『国書総目録』の「金石文」が引き出せるよう、シソーラスを工夫するとよいだろう。『内閣文庫国書分類目録』では「一五芸術」-「3 金石」-「(一) 金石学」となっている。

検索上問題になるのは、金石学のすぐれた達成を示す書でありながら「考証」や「随筆」の分類しかもっていない場合である。例をあげれば藤貞幹の『好古小録』（二巻付録一卷二冊 寛政六序 同七刊）、『好古日録』（二巻二冊 寛政八序 同九刊）などでこれらには「金石学」の語を加えたい。さらに言えば屋代弘賢の『道の幸』（三巻三冊）にも「金石学」の分類を付加したいと思う。『道の幸』は寛政四年、弘賢が柴野栗山らと京都、奈良の寺社をめぐり、宝物を調査した折の紀行文である。当時の意識としては「考証」であり、「考証学」の語の方がふさわしいかもしれないが、今日の分類である「金石学」を用いた

方が主題検索に資するところが大きい。考証という語は学問の方法や営みをあらわしており、その対象となる主題が別にあるのに対し、「金石学」は研究の対象を表現したわかりやすい名辞であることも考慮したい。

このように現代の解釈によって分類語を付加してゆくことは、個別にはある程度まで可能な作業である。よく言われるように日本十進分類法（NDC）の考え方を、江戸時代までの学問や書物にあてはめることには無理がある。けれどもそのもとになった発想、何を基準に分類するかという観点は、国書分類を検討する際にも、有効な視座を与えてくれる。その一例としてNDCが準拠したDDC（Dewey Decimal Classification）、デュエイが影響を受けたハリスと遡り、逆バーコン式と呼ばれるハリスの分類が拠り所としたバーコンの学問分類を参考に考えてみたい。

バーコン（1561-1626）は人間の知的能力を基準として分類を行った。知的能力とはMemory（記憶）、Imagination（想像）、Reason（理性）であり、それぞれに対応する知的産物がHistory（歴史）、Poesy（詩）、Philosophy（哲学）である。坂本賢三氏の解釈によれば⁽¹⁰⁾ Poesyは元来、創作という意味だから、狭い意味の詩だけでなく、劇や物語をも含んだ文学といってもよい。Philosophyも現在の狭い意味ではなく、当時はあらゆる学問を含んでいたから、科学ないしは学と考えることができる。

狭義の文芸作品は別として、現存する近世期の夥しい著作についてみると、この三要素を兼ね備えている著述が多い。金石学の例としてあげた『道の幸』は寛政年間の調査の記録であり、紀行文という文学ジャンルに属し、学問的成果を示す著作でもある。知的能力による三分類の要素は作品の中に分ちがたく混在しており、そのうちの一つに分類することはむずかしい。しかしDBならばそれぞれについて「寛政」「紀行」「金石学」と複数のキーワードを付与できる。検索の際は、そのうちの利用者が求める観点にそって、著作が抽出され配列されることになるだろう。

【国書総目録】書誌情報データベースの主題検索（山田）

三分類の基準をあてはめて検索のキーとなる語を考えてみることは、たとえば和歌の場合にも有効である。「文学」－「韻文」と分類される和歌は、まさにPoesyであり、Imaginationの産物であるが、何月何日の歌会の記録として、Memoryの範疇に属するものとの見方もできる。この時付与すべきキーワードは年月日であり、人名となるだろう。『群書類従』の中にあれだけ多くの分量を占めている和歌についても、Poesyとしてでなく、History（Memory）の視点から捉えれば、類従の分類意識の別な側面が見えてくるだろう。

以上古典籍分類法を検討し直し、DBの主題検索に活かすためには、分類の観点、基準の分析が必要なことを述べてきた。分類名辞を定義し、付与することも分ける基準と深く関わっており、併せ考えてゆかねばならない問題である。

おわりに

『国書総目録』の書誌的事項を電子化した本DBは岩波書店からCD-ROM版で刊行される予定である。短時日での実用化をめざしており、データ内容の変更や付加は考えていないが、研究支援ツールとして、また古典籍目録作成の参考ツールとして、より使いやすく充実したDBとなるよう、本稿では長期的に取り組むべき課題について、若干の私見を述べた次第である。

注

- (1) DBは「著作典拠ファイル」の名称で構築されてきたが、ここでは所在情報をのぞいた書誌的情報という意味で一般的な呼称を用いた。
- (2) 『国立公文書館内閣文庫所蔵資料展 古書に見る 暮らしの知恵－手引書の世界－ 平成六年五月十一日～十七日』 展示図録
- (3) 長澤規矩也 『新編 和漢古書分類法』（1962年刊、1980年修、汲古書院）
- (4) 『源氏物語を読むために』（1983年、平凡社）
- (5) 『長澤規矩也著作集』第7巻（1987年、汲古書院）
- (6) 「中世文学と絵画」『岩波講座日本文学史』第6巻（1996年、岩波書店）
- (7) 西尾光一「説話集」「説話文学」の項（1984年、岩波書店）

- | | | |
|-------------|-----|------------|
| | 洒落本 | 朗詠 |
| | 人情本 | 宴曲 |
| *草雙紙 | 赤本 | 平曲 |
| | 黒本 | |
| | 青本 | *芸能 |
| | 黄表紙 | ◆音楽・演劇 |
| | 合巻 | 音楽 |
| | 艶本 | 民謡 |
| | 戯文 | 箏曲 |
| | 咄本 | 楽器 |
| | 講談 | 琴 |
| | 実録 | 太鼓 |
| | | 三味線 |
| | | 楽譜 |
| | | ○舞踊 |
| | | [古代劇] 神楽 |
| | | 雅楽 |
| | | 田楽 |
| | | 幸若舞曲 |
| | | 能・能の本・謡曲 |
| | | ○能狂言 |
| | | 狂言・狂言本 間狂言 |
| | | 浄瑠璃 |
| | | 浄瑠璃評判記 |
| | | 奥浄瑠璃 |
| | | 義太夫 |
| | | 大薩摩 |
| | | 半太夫 |
| | | 河東 |
| | | 常磐津 |
| | | 富本 |
| | | 清元 |
| | | 新内 |
| | | 一中 |
| | | 蘭八 |
| | | 正伝 |
| | | 繁太夫 |
| | | 宮古路 |
| | | 説経 |
| | | *長唄 |
| | | 歌舞伎 |
| | | 狂言本 |
| | | 脚本 絵入根本 |
| | | 番附 絵本番附 |
| | | 鷓鴣石 |
| | | 役者評判記 |
| | | 操芝居 |
| 随筆 | | |
| 評論 | | |
| 日記 | | |
| 紀行 | | |
| *和文 | | |
| 文集 | | |
| 書簡・書簡集 | | |
| 書簡文範 | | |
| 漢文・漢文集 | | |
| 漢詩・漢詩集 | | |
| ○漢詩文・詩文・詩文集 | | |
| 狂詩 | | |
| 狂文 | | |
| ○狂詩文 | | |
| ○詩歌・詩歌集 | | |
| 和歌 | | |
| 歌学 | | |
| 歌論 | | |
| 歌集 | | |
| 歌文・歌文集 | | |
| 家集 | | |
| 歌合 | | |
| 連歌 | | |
| 連歌論 | | |
| 俳諧 | | |
| 俳論 | | |
| 連句 | | |
| 俳文 | | |
| 雑俳 | | |
| 川柳 | | |
| 狂歌 | | |
| 狂句 | | |
| 歌謡 | 神楽歌 | |

からくり
 見せ物
 ◆歴史 通史
 時代史
 年表
 藩史
 雑史 災異
 戦記
 史論
 伝記 言行録
 年譜
 陵墓
 系譜 系図
 家譜
 家伝
 紋章
 [史料] 文書
 記録 日記
 年代記
 部類記
 雑記
 雑録
 [歴史図画] 花押
 印章
 *外国史
 ◆地理 地誌 案内記
 細見記
 評判記
 *外国地誌 漂流記
 見聞記
 探検記
 地図
 絵図
 ◆政治・法制 [附故実]
 *制度・法則
 外交
 外事
 軍事
 海防
 消防
 防火
 訴訟

官職
 補任 名鑑 武鑑
 故実 有職故実
 武家故実
 儀式
 祭礼
 礼法
 年中行事
 調度
 服飾
 財政 租税
 度量衡
 ◆経済 貨幣
 ◇風俗・[生活]
 伝説
 風説書
 怪談
 怪異
 奇談
 家事
 衣服
 裁縫
 手芸
 理容
 化粧
 飲食・食物
 住居
 家具
 育児
 *外国風俗
 ◆教育 教訓 家訓
 格言
 心学
 往来物
 ◆理学 数学 和算 塵劫記
 珠算
 天文
 曆法
 曆
 気象
 地質 岩石
 物理
 化学

【国書総目録】書誌情報データベースの主題検索 (山田)

- | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|----------|-----|-------|
| | 工学 | | | | 工芸 | 金工 |
| | 博物 | 鉱物 | | | | 木工 |
| | | 生物 | 動物 | | | 漆工 |
| | | | 植物 | | | 陶磁 |
| | | | 魚介 | | 彫刻 | |
| ◆医学 | 薬物 | | | | ○書画 | |
| | 本草 | | | 書道 | 篆刻 | |
| | 鍼灸 | | | | 文房具 | |
| ◆産業 | 農業 | | | ◆諸芸 | 茶道 | |
| | 園芸 | | | | 造園 | 庭園 盆石 |
| | 畜産 | 獣医 | | | 花道 | |
| | | 蚕業 | | | 香道 | |
| | 林業 | | | | 占卜 | 相法 |
| | 水産 | | | | 陰陽道 | |
| | 漁業 | | | | 易学 | |
| | 塩業 | | | | 料理 | |
| | 鉱業 | 鉱山 | | | 玩具 | |
| | | 鑄造 | | | 遊獵 | 狩獵 |
| | 工業 | | | | | 釣魚 |
| | 土木 | 測量 | | | | 放鷹 |
| | | 治水 | | | | 犬追物 |
| | 建築 | 築城 | | | | 闘鶏 |
| | | 城郭 | | | | 相撲 |
| | 造船 | | | | | 打毬 |
| | 商業 | | | | | 蹴鞠 |
| | 貿易 | | | | 遊戯 | 囲碁 |
| | 交通 | 海運 | 船舶 | ◆[武学]・武術 | | 将棋 |
| | | 航海 | | | 兵法 | |
| | 通信 | | | | 武具 | 刀劍 |
| | 物産 | 製紙 | | | | 薙刀 |
| | | 醸造 | | | | 馬具 |
| | | 染織 | | | | |
| ◆芸術 | 美術 | 絵画 | 画論 | | | 劍術 |
| | | | 図案 | | | 槍術 |
| | | | 絵巻 | | | 弓術 |
| | | | 絵本 | | | 馬術 |
| | | | 画帖 | | | 柔術 |
| | | 考古 | | | | 火術 |
| | | 印譜 | | | | 砲術 |
| | | 金石文 | | | | 棒術 |
| | | 拓本 | | | | 拳法 |
| | | 印刷 | | | | 忍術 |